

「日本写真保存センター」調査活動報告(15)

戦後史を彩る写真の数々 — 収集・保存した写真原板から —

松本 徳彦 (専務理事)

「日本写真保存センター」の主たる活動は写真原板の収集・保存と利活用に向けてのアーカイブの構築である。写真原板についてはすでに物故写真家の遺族のもとを訪ね、写真原板の保存状況の調査を行ってきた。ここで問題となったのが「保存環境」で、多くのところで加水分解によるフィルムの劣化(ビネガーシンドローム)の発生があった。わが国の「保存環境」は高温多湿と決してよいものではない。さらに保存についての科学的な情報が一部の専門家だけに留まっていて、現場の写真家にその情報が正しく伝わっていなかったために、フィルムの劣化に気付くのが遅れてしまったきらいがある。保存センターではフィルムの劣化について、マスコミやセミナー、JPSの会報を通して実態と保存対策を公表してきたが、いまだに写真家自身がフィルムの劣化や保存対策を考え真剣に検討しているようには思えないところがある。その理由の一つに情報不足に加え保存に適した包材等の入手先が限られ、しかも値段が高いことから使用されていない。これは写真家個人だけでなく、公的機関のフィルムについても同じことが言える。

現在保存センターが収集している写真原板の一部から、敗戦から昭和35(1960)年ごろに撮影されたわが国の戦後史を彩る写真を掲載し、保存センターが収集している内容を紹介すると同時に、各地に眠っている(残されている)フィルム類の発掘と収集に協力をお願いしている。

戦後史を彩る記録と写真家の眼

「写真は時代の目撃者」と呼ばれ、1枚の写真が物語る内容は言語を超えて多くの人に訴える力を持っている。戦前は勿論のこと敗戦後の日本の姿を知る人も次第に少なくなっている。それだけにその時代の証となる写真記録が貴重になってくる。その時日本人はどんな暮らしをしていたのか、なにを食べ、どんなところに住み、どんな働きをしていたのか。そんな些細とも思える事柄も時を経るごとに記憶から薄れ、苦しかったこと辛かったことは忘れ去り、佳き思い出だけが記憶に留まる。家族の古いアルバムをめくるとその時代の空気がそこに漂っていることに気付く。

写真には出来事や事象だけでなく思い出もいっしょに写し込まれている。写真が「記憶の鏡」と言えるのもそうした記録だけに留まらない不思議な鏡だからなのだろう。東日本の震災時に被災された人たちが真っ先に探したものに「家族アルバム」があったことは記憶に新しい。アルバムが心の拠りどころとなり、癒やしや絆となっていた。

写真保存センターでは様々な写真原板を収集している。会報154号で紹介した「原爆長崎の被災状況」(撮影山端庸介1945年)のようなドキュメントから、日々の暮らしや風俗、都市景観、銀幕を飾った有名スターたちや文士、芸術家、政治家などの人物像、数寄屋建築に町の家並み、コンテンポラリーな写真表現と多彩である。今回は戦後間もなくの激動した時代を捉えた写真を紹介することにした。

●吉田 潤「額縁ショー」1947年

見渡す限りの焼け跡にバラックが建ち始め、闇市に人が群がり、復興の兆しが見え始める。軍国主義の閉ざされた社会から、民主的な社会に移り変わる戦後混乱期、官能的な裸婦が粗末な仙花紙に刷られたカストリ雑誌

が飛ぶように売れる。昭和22(1947)年「民主化は裸から」の掛け声で始まったのが「額縁ショー」であった。舞台に額縁が置かれそ



の中に上半身裸の女性がたたずんでいる。そのわずか数分のショーに大勢の観客が列をなした。抑圧から解放された民衆の姿がそこにあった。撮影したのは吉田潤(1909～2003)。戦前満州で活躍し敗戦と共に裸一貫で引き上げ、『週刊サンニユース』で戦後風俗や時の人物を撮影し、『戦後フォーカス293』を著した。

●エリザベス・ウォルシュ・オハラ 「花嫁衣装の着付け」1948年頃

昭和23(1948)年、アメリカン・プレジデント・ライズ社に勤務する夫と共に来日したエリザベス・ウォルシュ・オハラ(1918～1966)が1923年から54年まで、西宮市夙川滞在中に捉えた日本人の姿を写真集『JAPAN: 1948～54』としてアメリカで出版。そこには日本人の日々の暮らしや風習が文化人類学的視点から淡々と記録されていた。オハラは「日本人の忍耐力、独創性、勤勉さ、細やかな心遣い、おもてなし振り、礼儀正しさ、ユーモアのセンス、子供への愛情、家族の絆、内



面的な美と落ち着きを貴ぶ心」に感銘を受けたという。異文化圏から見た日本人観が素直な目で撮られた貴重な写真群である。こうした写真記録も収集し、戦後史に厚みを加えたい。

●フォーレス・ブリストル
「破壊され修理を待つ戦車群」 1950年頃



昭和25（1950）年6月に朝鮮半島で勃発した朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国の戦いは、南を支援する米軍を中心とする国連軍と、北に義勇軍を送り込んだ中国軍との戦いに発展。戦乱は3年におよび、占領下にあった日本は米軍の基地として軍需物資の調達、戦車や艦船の修理、運輸通信機器の整備など米軍の後方支援で、日本経済の復興をもたらした特需景気に沸く。戦後間もなく来日したイーストウエスト通信社所属のフォーレス・ブリストル（1908～97）は、動乱で破壊された戦車や軍用車両の修理状況や国内産業を撮影し、通信社を通して内外に配信した。

●浅野 隆 「浮浪児の取調べ」 1950年頃



敗戦後の混乱は全国各地で見られた。横浜は米海軍の基地横須賀に近く、戦後も長らく基地機能を残して接収された場所が多く残っていた。市内に歓楽街や風紀地区があり、夜の女や浮浪児を取り締まる警察官の姿が随所に見られた。戦前の東方社で木村伊兵衛の暗室作業を行っていた浅野隆（1926～2013）は、昭和25（1950）年頃から神奈川県警や横浜市警の捜査に同行して撮影に従事する。のち横浜市の広報課に勤務。革新市長といわれた飛鳥田一雄横浜市長のもとで広報誌の撮影を長らく手掛ける。

●佐伯義勝「内灘村の子どもたち」 1953年



昭和28（1953）年6月、金沢市の北、日本海岸に広がる砂浜の漁村内灘に「駐留米軍の試射場」が設けられることになり、地元漁民が猛烈な反対闘争を行った。その内灘で佐伯義勝（1927～2012）は「金は一年、土地は万年」のスローガンを掲げて試射場設置に反対する漁民や村民、応援する労組員等を撮影する。その後、昭和31（1956）年の東京立川の砂川町での立川基地拡張に反対する無抵抗の町民や労組員に、警棒を振りかざして襲いかかる警官隊を撮り、迫真のドキュメントとして知られる。以後、経済発展の波に乗って婦人雑誌の料理写真で活躍し、その卓越した表現はこれまでの料理頁を一変させた。